

『砂漠のスクリーン』



ガラスは映像を可視化させる感光板のような半透明のスクリーンである。イメージは光だけをその面に留めて実在的な作用は通過する。建築にはその土地の気候や歴史を記憶し留める働きがある。ガラスは美しい景色を映すだけでなく、風土そのものを受けとめることもできるのではないだろうか。ガラスの文化が生まれたといわれる砂漠の大地で砂粒や傷を受けとめる。本提案では、砂漠に「現場打ち」のガラス建築を想定し、それにより行き交う人々の拠り所を提案する、建築は砂漠で蜃気楼のように立ち上がる。



砂漠の砂丘の上から管状の型を通しガラスを流し込み、柱を成型する。



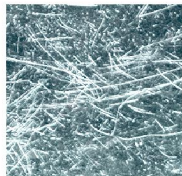
砂丘の表面に現場打ちのガラスの屋根を架ける。その時の砂丘の形を記憶する。



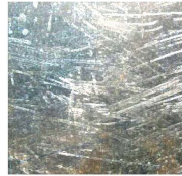
砂が吹き出され内部空間が生まれる。時間とともに砂や傷、割れにより明暗が生まれ、新しいオアシスのような空間が生まれる。



砂漠で生まれたガラスはざらざらで光を透過したり、乱反射したりする。



砂漠の気候の中で様々な傷がつけられ光はやわらかくなってゆく。



砂や傷が溶け合い、独特な色味や影が生まれる。



砂漠の遊牧民のテントのようなその建築は砂漠を歩く人々の足を止め、厳しい砂風から守る。植物や水場も砂で覆われずわれわれに安らぎを与える。